

とんぐり

No.57



兵庫県立

南但馬自然学校

HYOGO KENRITU MINAMI TAJIMA SHIZEN GAKKO

(Nature Education Center)

安全・安心な施設を目指して



兵庫県立南但馬自然学校

副校長 内橋 紀裕

まだ寒さが残る4月下旬、自然学校の子どもたちが元気に入校してきました。そして、初雪の便りが聞こえ始める12月初旬まで、本年度は63小学校(53グループ)が南但馬自然学校を利用されました。

本校ではこれまで自然学校の中核施設として、子どもたちが自然の中で人とのふれ合いや地域社会への理解を深めるなどの様々な活動に安心して取り組めるよう、プログラム相談や施設設備の管理、活動場所・用具の安全点検など、安全・安心な環境づくりに努めてきたところです。

幸いにも、ここ数年大きな事故はありませんが、昨年度の新型インフルエンザの流行の経験や「平成19・20年度研究紀要(安全管理)」「リスクマネジメント」に関する研究を受け、本年度は改めて事故防止や危機管理について関係者の意識の向



上を図ることとしました。

そのためには、本校の職員と利用校の関係者が一緒になって南但馬自然学校についての理解を深めていくことが大切であると考え、まず、例年実施している事前説明会において、実際に施設や活動場所などを見て確認する施設見学の時間を十分に確保しました。

次に、必ず下見を実施するよう各校に依頼しました。本校の職員と先生方が実際の活動場所での時間をかけて丁寧に考えていくことで、プログラム編成や危険回避に大きな効果があつたと考えています。

また、自然学校に不安を抱える保護者と児童が、先生方と相談の上、直接来校されることもありました。

そして、出前講座の活用です。この事業は南但馬自然学校の職員が要請に応じて県下各小学校を訪問し、学校の教育活動全領域で「生きる力をは

ぐくむ体験活動」等の支援を行うものです。平成21年度は16校でしたが、本年度は積極的な広報の結果、学校の理解を得て25校で実施することが出来ました。保護者説明会等で本校職員が自然学校について直接説明することで、学校関係者や保護者の自然学校に対する不安や疑問を払拭し、理解を深めていただく貴重な機会になりました。また、子どもたちは、ロープワークや火おこしなどを実際に体験することで自然学校への興味・関心や安全への理解が深まったと考えています。

さて、平成22年度の自然学校は、当初懸念された新型インフルエンザの影響もなく、各学校ともほぼ順調に実施できたようです。しかし、今年の猛暑や突如の雷雨などの気象状況により、プログラムの変更や避難所で一時的待機するケースもありました。9月以降は、クマによる被害が全国で報告され、本校でも夜間の活動制限や活動場所の変更、クマ鈴の携帯など、子どもたちの安全を最優先に各校の先生方と調整を行いました。

その結果、今年度も無事に自然学校を終了することができました。これも事前説明会や下見、出前講座、そして本番の自然学校と熱心にご指導いただいた先生方をはじめ、指導補助員や技術指導員の方々など、多くの関係者のご尽力のお陰と深く感謝申し上げます。

表紙の写真

ミヤマカタバミ

早春に、ブナの林床などで咲くカタバミ科の一種です。花を電球の光に例えるなら、平地でよく目にする、南アメリカ原産の帰化植物、ムラサキカタバミが、100ワットの裸電球ならば、薄暗い林床でひっそりと咲くミヤマカタバミは、ほのかに光る豆電球と言ったところでしょうか。

花びらの中心から外へ伸びる細い筋や、ハートを3つ寄せ合わせたような葉っぱが、深山に咲く花のイメージを掻き立てる清楚な姿が魅力です。

訃報

12年間、兵庫県立南但馬自然学校の校長として兵庫県の教育の推進に尽力いただいた森本雅樹先生が、11月16日に急逝されました。

心よりご冥福をお祈りいたします。

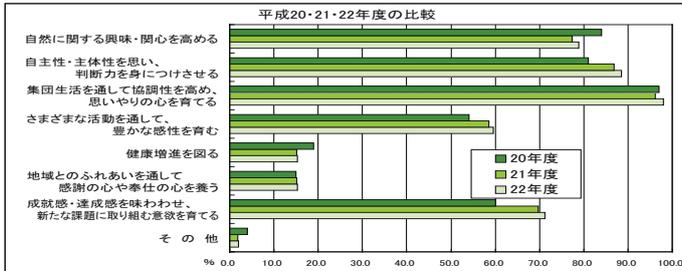
来年度につきましても、先生方との連携を大切にしながら、より安全・安心な環境づくり(自然学校づくり)に努めて参りたいと考えていますので、ご理解とご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

平成 22 年度の自然学校 ～実施報告書から見えてくること～

平成 22 年度は、53 グループ 63 校が兵庫県立南但馬自然学校（以下、「本校」という。）を利用して自然学校を実施した。利用校の自然学校実施報告書（以下、「報告書」という。）のまとめから、「自然学校のねらい」と「自然学校の充実を図るための取組」について、平成 22 年度の自然学校を振り返ってみることとする。

1 「自然学校のねらい」から（過去 3 年間の変化）

自然学校のねらいは、「自主性・主体性・判断力」「豊かな感性」「成就感・達成感」の項目が、年毎に増加している。



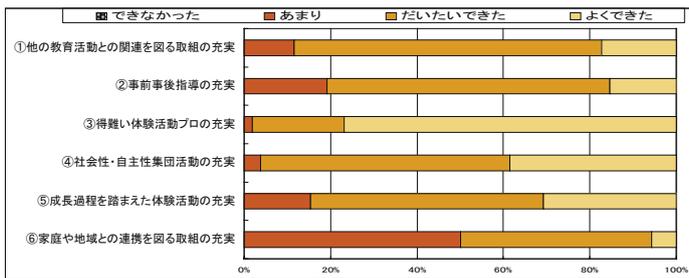
また、平成 20 年度から 21 年度にかけてはやや減少したものの 22 年度にかけて増加したものは、「自然に関する興味関心」「協調性・思いやりの心」の項目である。「健康増進」「感謝の心・奉仕の心」も、22 年度にかけて若干増加した。ねらいに関しては、すべての項目で昨年度を上回っている。

グラフから、ここ数年の傾向として、学校はまず「協調性・思いやりの心」を一番のねらいとして、次に「自主性・主体性・判断力」、その次に「自然に関する興味関心」をねらいとして入校してきていることがわかる。

て、次に「自主性・主体性・判断力」、その次に「自然に関する興味関心」をねらいとして入校してきていることがわかる。

2 「自然学校の充実を図るための取組」から

自然学校のねらいは、自然学校評価検証委員会「生きる力を育む自然学校」（平成 20 年 3 月）を踏まえ、自然学校の一層の充実を図るための 6 つの方策について、下のグラフにとりまとめた。昨年度は 5 段階、今年度は 4 段階で回答してもらっているため、年度ごとの比較はしていない。



各項目において「よくできた」「だいたいできた」と回答した割合で高かった順に見ていくと、まず「③学校では得難い体験活動プログラムの一層の充実」、次に「④社会性や自立性等を育むための集団活動の充実」、その次が「①他の教育活動との関連を図る取組の充実」と続いている。また、「⑤子どもの成長過程を踏まえた体験活動の充実」「②事前・事後の学習活動の一層の充実」においても、80%を越す割合で達成できている。

なお、「⑥の家庭や地域との連携を図る取組の充実」のみ 50%に達していないので、各利用校に対して家庭や地域との連携が成功した事例等を紹介するなど、自然学校の一層の充実を図っていきたい。

3 自然学校についての全体的な感想から

- ☆ 中心となるプログラムをしばらく、比較的ゆとりのあるプログラムを組んだこともあり、サワガニを見たり植物を観察したりと、児童が進んで自然と触れ合うことができた。今回実施した活動は、ほとんどの児童が初めての体験だったこともあり、「楽しい」「もっとやりたい」という声が聞かれ、充実した自然学校になった。
 - ☆ 4泊5日の自然学校の中で子どもたちが日頃あまりできない活動を体験できたことは、子どもたちの感性を豊かにしてくれたように思う。また、選択プログラムを取り入れたことで、子どもたちが思い思いのことについて取り組める時間を確保できたことが成果である。
 - ☆ 児童の事後指導から恵まれた環境で体験活動ができたことが明らかになり、振り返りを通じて自ら考え、行動する態度を身につけることができ、個々のニーズにあった自然学校を実施することができた。
 - ☆ 様々なものを手作りし、手間をかけることで普段あたり前にやっていることが、多くの人々の支えによってできることを体験し、感謝の心が芽生えたことが良かった。
- などが挙げられる。他にも、フリータイム（自由時間）の確保による子どもたちののびのびとした活動が見られた、班別活動による友だちと協力することや他人を思いやることの大切さに気づいた、紅葉の色づいた葉や様々な形の枝を使ってのクラフトによる自然の豊かさに触れての感動を得た、あまり指示や禁止をしないことによる子どもたちの失敗や迷いを通しての成長がみられた、などの感想が報告されている。

このように、先生方の工夫や仕掛けにより、自然学校がさらに充実したものとなり、「生きる力をはぐくむ体験活動」へとつながるものであると考えている。本校では、各利用校の自然学校のねらいに基づき、プログラム編成やそのねらいに向けた活動内容や活動形態に係る相談を受けている。そして、出前講座や下見対応、実施期間中に指導・助言を行い、各利用校のねらいを達成する自然学校になるよう学校との連携を深めていきたい。



<4日目 しめ縄づくり>



<4日目 座禅体験>



<5日目 ダム建設現場見学>

○ 与布土ダム建設現場を見学

最終日は、退校後、与布土地域に建設されている与布土ダムの建設現場の見学を行いました。小さなマイクロバスでしか現場へ移動できないため、現場見学グループと、かかし鑑賞グループに分かれて、交代して全員が与布土ダムの現場を見学できるように工夫していました。説明の中で出たクイズに答えたり、総合的な学習の時間に考えてきた質問をしたりするなど、児童の真剣な姿が印象的でした。

○ 事後指導（お礼の手紙と自然学校見聞録）

自然学校実施後、与布土地域自治協議会と連絡をとり、コース別の活動でお世話になった方々や講演をいただいた方へお礼の手紙を書きました。

また、自然学校見聞録として各自が自然学校の様子を原稿用紙にまとめ冊子にしました。しおりや自然学校ファイル（事前学習でまとめたものや学習の記録などをまとめておいたもの）を整理し執筆活動に生かしました。事前指導（かかし作りや調べ学習等）や前日の家庭での様子などを項目としてあげる児童も多くいました。原稿用紙で190枚を超える大作を仕上げた児童もいました。「題材として十分に思い出に残るような経験や体験があれば、書き続けることができるということを書けることができた」という担当の先生の感想も聞かれました。

<自然学校のプログラム編成にむけて>

学校独自の取組が定着してくると、とかくプログラムがマンネリ化しがちですが、担当教員が、その年度の児童や実施時期等の様々な状況を踏まえ、工夫することにより実りある自然学校となります。今回、このようにすばらしい取組がなされたのは、事前準備が十分になされ、児童と教員、地域の方々の思いが一つになったことが成功の要因として挙げられます。

今後とも、充実した自然学校を実施するために、平成二十年度に発行された「自然学校実践事例集」（兵庫県教育委員会義務教育課または南但馬自然学校のHPからダウンロード可）の活動事例等を参考にプログラムを工夫していきましょう。そして各学校の創意工夫により一層充実した自然学校が実施されますことを願っています。

クラブ紹介

《わらリース》 ～一つで二度楽しめる優れもの～

1 土台となる枠

- ・わらで縄をない、針金で結んで輪を作ります。



2 飾り用のパーツを用意

- ・松ぼっくりにスプレーで色づけします。つり下げの場合には細い針金を使います。市販の飾りを使うこともでき、装飾に変化が生じます。



3 飾り付け

- ・飾りをボンドで固定しながら、枠に取り付けます。
- ・赤、緑、白等の色はクリスマスっぽいイメージを演出します。松ぼっくり等は竹串を付け、差し込みます。



4 正月パターン

- ・クリスマスっぽいイメージの飾りを稲穂、紅白の扇子、餅花等に取り替えると正月のイメージになります。



地域と一体となった実りある自然学校 ～加古川市立陵北小学校の取組～

兵庫県立南但馬自然学校 主任指導主事 中井 宏

○ はじめに

兵庫県立南但馬自然学校では、12月の第1週で平成22年度の自然学校が終わりました。どの学校もねらいに即した自然学校を実施していましたが、今回は地域との交流を主なねらいとして自然学校を実施した加古川市立陵北小学校の取組を紹介します。

総合的な学習の時間と関連つけた取組で、3日目の活動を除き近隣の与布土地域に出かけ、地域にどっぷりとふれ合うプログラムを展開しました。

加古川市立陵北小学校のプログラム (11月29日～12月3日に実施) 児童数64名		
日 曜日	活 動 名	備 考
1日目(月)	入校式	与布土小学校に隣接する会館で地域の方の講演を聞いた後、入校しました。
	施設散策OL	南但馬自然学校内を詳しく探検しました。
2日目(火)	与布土地域探検 ハイキング	ポイントラリーで周りながら与布土地域をすみずみまで知っていきます。 途中で歌声大会や芝滑りをしながら楽しく探検しました。
	火おこし体験	グループで協力して火おこし体験をしました。
	家族への手紙	家族へ手紙を書きました。
3日目(水)	朝来山登山	早朝に朝来山へ登山に出かけました。
	野外炊事	焼きそば、シチュー、豚汁などをグループごとに選んで作りました。
	シュラフ泊	寝袋で寝る体験をしました。
4日目(木)	与布土地域交流 (選択活動)	しめ縄、座禅、衣笠山登山、絵手紙の中から一つを選択します。 各活動場所まではマウンテンバイクで移動しました。
	キャンプファイヤー	大屋根広場で最後の夜の活動をしました。
5日目(金)	自然散策	南但馬自然学校でゆったりと過ごしました。
	退校式	退校後、与布土かかし祭りと与布土ダム建設現場の見学をしました。



<1日目 地域の方の講演>



<2日目 かかし祭り>



<2日目 芝滑り>

○ かかし祭り

与布土地域の行事に「かかし祭り」(かかしコンテスト)があります。総合的な学習の時間に調べ学習をする中で、陵北小学校の自然学校実施期間中に「かかし祭り」が開催されることがわかり、出品することにしました。子どもたちは、自然学校実施前から「かかし祭り」に向けて、各グループで協力して6体のかかしを作りました。2日目のハイキングでは、「かかし祭り」の会場に並ぶ数々のかかしを見ながら歩きました。

審査結果は、見事入賞。最終日には、地域の方から直接子どもたちへ賞状の授与がありました。子どもたちも大喜びでした。

○ 選択活動

4日目には、しめ縄づくり、座禅体験、衣笠山登山、絵手紙の4つの中から1つを選んで活動する選択活動に取り組みました。子どもたちは与布土地域に出かけ、地域の方々からいろいろと教えてもらいながら熱心に活動に取り組みました。活動場所までは、グループごとにマウンテンバイクで出かけました。午前で活動を終え、昼食時には全員がヒメハナ公園に集まって食事をとりました。

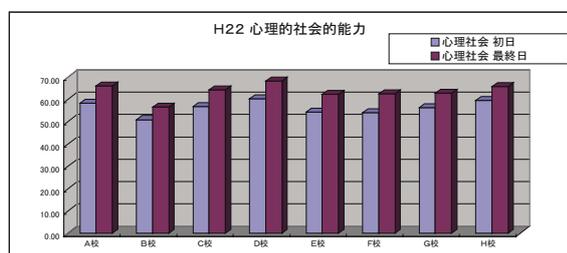
南但馬自然学校調査・研究委員会から

本校では、平成13年度から「兵庫県立南但馬自然学校調査・研究委員会」を設置し、自然体験や集団生活等とおして、子どもたちの「生きる力」をはぐくむ自然学校の一層の充実を図るため、様々な調査・研究を進めている。平成21・22年度は、2つの研究テーマに分かれ、調査・研究を行ってきた。その調査結果の概要を紹介する。

☆ 研究テーマ①「兵庫県自然学校の実施期間の弾力化による影響－4泊5日の実施を受けて－」の取組 ☆

自然学校は、これまで5泊6日で実施されていたが、平成21年度から実施期間の弾力化により、本校利用校ではすべて4泊5日の実施となった。この期間短縮による自然学校の影響について、I K R評定用紙簡易版(※)を用いて、児童に入校式及び退校式でアンケート調査を実施した。

下のグラフは、平成22年度利用校から教育事務所単位に抽出した8校の心理的社会的な能力(非依存、積極性、明朗性、交友・協調、現実肯定、視野・判断、適応行動の7つの能力を合わせたもの)におけるI K R得点を表したものである。このグラフから、心理的社会的な能力のI K R得点が向上していることがわかる。



(グラフ1) 自然学校実施前後におけるI K R得点の比較(平成22年度)

また、徳育的能力(自己抑制、自然への関心、まじめ勤勉、思いやりの4つの能力を合わせたもの)や身体的能力(日常的行動力、身体的耐性、野外技能・生活の3つの能力を合わせたもの)もグラフは提示していないが、すべての調査対象校において、I K R得点の向上が見られた。平成21年度も同様の傾向であったが、自然学校の期間短縮の初年度であり、その対応に苦慮したためか、I K R得点の向上が小さい。

平成22年度はその経験を踏まえ、より効果的な自然学校の実施がなされたためか、I K R得点の向上が大きい。これらから、実施期間が4泊5日になっても

「生きる力」の向上という観点では、5泊6日の自然学校と変わらないことがわかった。

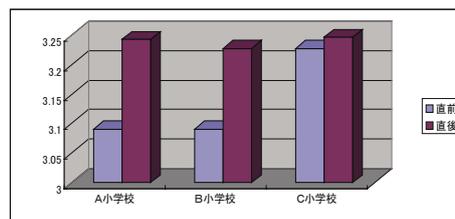
しかし、今までのプログラムの踏襲から若干の詰め込み傾向も見られ、それらによる忙しさから自然学校そのものの目的意識が希薄になる可能性もある。今後とも、利用校と本校が連携し4泊5日のプログラムの研究開発を進め、充実した自然学校となるよう取り組んでいく必要がある。

※ I K R評定用紙簡易版とは、心理的社会的な能力、徳育的能力、身体的能力の3つの能力で「生きる力」を測定するための28項目のアンケート用紙のことをいう。

☆ 研究テーマ②「環境教育を視野に入れたプログラムの展開等」の取組 ☆

環境教育に取り組んでいる3校を抽出し、「水」「森」「動物」「土」などの項目に関する「自然環境についてのアンケート」を4回(自然学校1ヶ月前・自然学校入校式前・自然学校退校式後・自然学校1ヶ月後)実施するとともに、自然学校プログラム展開との関連について小学校の担当教員に聞き取り調査等を実施した。

調査の結果より、自然学校前より自然学校直後の方が、自然に対する態度得点が高まっていることから、児童の自然に対する態度は、自然学校直後には肯定的に変容すると考えられる。児童が普段生活している環境により、C校のように自然学校実施直前から全体の態度得点が高い学校もあるものの、「草木染め」「野外炊事」「隠れ家づくり」「朝来山登山」「里山づくり」などの環境教育を視野に入れたプログラムを展開することで、児童の自然に対する態度が肯定的に変容したのではないかと考えられる。しかし、自然学校1ヶ月後の調査では、せっかく肯定的に変容した児童の自然に対する態度も元に戻ってしまうということも明らかになった。



(グラフ2) 自然学校実施直前と直後における各学校の全体の態度得点平均比較

今回の調査結果から、自然学校で変容した児童の自然に対する態度を効果的に継続していくためには、①小学校3年生の環境体験事業から小学校5年生の自然学校への関連性を図るために小学校4年生でも継続的に環境教育を視野に入れた取組を実施すること。②自然学校実施期間中に環境教育を視野に入れたプログラムを展開すること。③自然学校実施後も環境教育を視野に入れた取組を継続して実施すること。④学校だけでなく家庭や地域と連携して環境教育を視野に入れた取組を実施することが重要ではないかと考えられる。

なお、詳細については平成21・22年度の「研究紀要」に掲載しています。本校のホームページからも、ダウンロードすることができますので、ご一読ください。

(文責 主任指導主事 北條 勝也)

(7)どんぐり

平成 22 年度 兵庫県立南但馬自然学校における傷病発生状況から

【傷病発生状況】 (表 1)

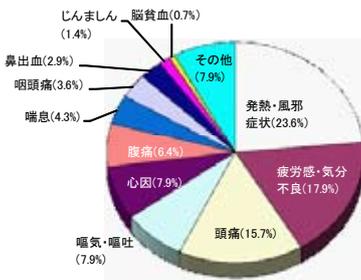
	内科	外科	合計
H 22 年度傷病発生件数 (件)	140	198	338
H 22 年度傷病発生率 (%)	0.7	0.9	1.6
H 21 年度傷病発生率 (%)	0.9	0.6	1.5
17 年間平均傷病発生率 (%)	0.7	0.9	1.6

【医療機関受診状況】 (表 2)

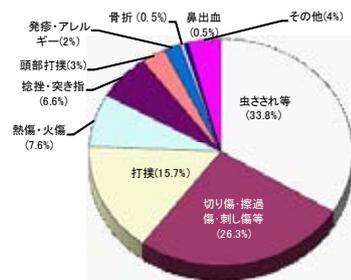
	内科	外科	合計
H 22 年度受診件数 (件)	22	15	37
H 22 年度受診率 (%)	0.1	0.1	0.2
H 21 年度受診率 (%)	0.2	0.1	0.3
17 年間平均受診率 (%)	0.1	0.1	0.2

※発生率・受診率は、処置件数を利用児童延べ人数 21,251 人で割り算出した。

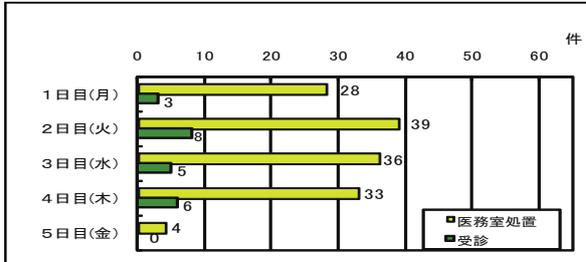
【内科】 (グラフ 1)



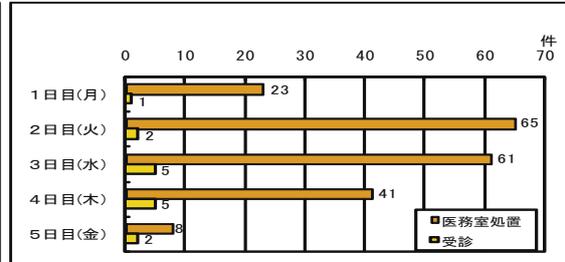
【外科】 (グラフ 2)



【日別傷病発生件数 (内科)】 (グラフ 3)



【日別傷病発生件数 (外科)】 (グラフ 4)



1 傷病記録より

(1) 傷病発生状況及び医療機関受診状況

今年度の傷病発生率は表 1 のとおり、昨年度に比べて内科は 0.9%→0.7%と減り、外科は 0.6%→0.9%と増加した。このことは 17 年間の平均傷病発生率と同程度である。医療機関受診率は、表 2 のとおりで、内科は 0.2%→0.1%と減り、外科は 0.1%→0.1%と同程度だった。内科の傷病発生率が減少したのは、22 年度は感染性の疾患が流行しなかったためだと考えられる。また、外科の傷病発生率が増加したのは、虫さされ等が昨年度の 36 件から今年度は 67 件と増えたためである。内科の医療機関受診率が昨年度より減ったのは、自然学校までの健康管理がされていたことと、健康観察等が丁寧に行われ経過観察で済み受診まで至らなかったことが考えられる。外科では、傷病発生率が上昇した割りに医療機関受診率が同程度だったのは、虫さされ等の軽度の傷病では医療機関を受診しなくてもすんだためだと考えられる。

(2) 傷病発生状況の内訳

内科の傷病の内訳は、グラフ 1 のとおり、「発熱・風邪症状」「疲労感・気分不良」「頭痛」の順で多い。外科の傷病の内訳は、グラフ 2 のとおり、「虫さされ等」「切り傷・擦過傷・刺し傷等」「打撲」の順で多い。

(3) 日別傷病発生件数

日別傷病発生件数は、グラフ 3、4 のとおり、内科外科とも 2・3・4 日目の順で多い。医療機関への受診は内科は 2・4・3 日目の順で、外科は 3・4 日目に多く傷病発生件数の順と違っている。

2 健康・安全管理と自然学校

安全指導を繰り返し丁寧に行い、その効果から大きな事故が少なかった。さらに事故を最小限に防ぐ指導を徹底したい。虫さされ等に関しては、ヒルによるものも多く、露出部の少ない服装や虫除けスプレーの使用、ヒル用の忌避剤等の情報提供など少しでも被害を減らすことが出来るようにしたいと考えている。また 9 月には残暑のためか半袖短パンといった服装が目立ち、そのため野外炊事で火傷をする児童が多かったことから、今年度の反省を踏まえて今後も指導に当たりたいと考えている。

本校では、集団で使用するということを意識し、感染症や食中毒など集団発生時の緊急体制を整えたり、危機管理意識を学校と共有したりしていきたい。

5・6 月は気温が低く、9 月は残暑厳しいといった気候ごとの体調管理や健康状態、感染症の動向など、教員・帯同救急員・指導補助員等と連携を密にし、児童の健康管理に努めていきたい。

自然学校を健康で安全に過ごし、よい体験を経験することで、子どもたちが生きる力を身につけ、その後の大きな成長につながることを願っている。

(文責 指導主事 林 潤子)

自然体験活動 1 日講座

目的: 様々な自然体験活動に係る技術や指導法について研修し、指導力の向上を目指します。
対象者: 公立小・中・高等学校（神戸市立を除く）及び特別支援学校教員（初任者研修及び 10 年経験者研修の校外研修としても受講可）
募集定員: 各回 40 名程度

回	期 日	内 容
第 1 回	平成 23 年 6 月 28 日 (火)	実習「自然に親しむ」(ゲーム・遊びの指導)
第 2 回	平成 23 年 10 月 4 日 (火)	実習・演習「自然を感じる」(アクティビティの指導・開発)
第 3 回	平成 23 年 11 月 22 日 (火)	実習「自然物でつくる」(草木染め、クラフト指導)

自然学校出前講座

目的: 本校の職員が要請に応じて県下各学校等を訪問し、自然学校等「生きる力をはぐくむ体験活動」の支援を行います。
実施期日: 平成 23 年 4 月～平成 24 年 3 月
内 容: ◆自然学校に関すること
 ・自然学校の趣旨説明・事前相談・事前学習・保護者説明会・事後学習・事後相談
 ◆プログラムデザインに関すること ◆体験学習法に関すること
 ◆自然とふれあう手立てに関すること ◆人とふれあう手立てに関すること
申込方法: 実施 1 ヶ月前までに「自然学校出前講座申請書」で申し込んでください。

自然学校講座 (指導者入門)

目的: 自然学校の趣旨や指導者の役割を理解するとともに、野外体験活動の基礎的な知識・技術を学びます。
期 日: 平成 23 年 8 月 22 日 (月)～24 日 (水) 1 日または講座単位の受講も可
対象者: 大学生、一般県民、県下の公立学校教員（高等学校 10 年経験者研修として受講可）、その他自然学校に関心のある者
募集定員: 30 名
内 容: 兵庫県の自然学校と体験活動について、アクティビティ体験、プログラムデザイン、活動におけるリスクマネジメント、キャンプファイヤー指導の基礎基本、野外炊事指導の基礎基本 等
参加費: 食事・宿泊・リネン代、活動材料費、保険料が必要です。

プレ自然学校・アフター自然学校

目的: 自然学校の事前・事後体験活動の充実を図ります。
期 日: 日帰り又は 1 泊 2 日
 (1) 自然学校受入期間中
 金曜日・土曜日受け入れ可（金曜日から土曜日にかけての 1 泊 2 日も可）
 (2) 自然学校受入期間以外 いつでも受け入れ可
対象者: 原則として県下公立小学校 5 年生としますが、小学校 4 年生以下のプレ自然学校、小学校 6 年生のアフター自然学校としても実施可能です。
内 容: より効果的な自然学校を実施するために必要な事前・事後体験活動（例：施設散策オリエンテーリング、朝来山登山、自然体感ゲーム、クラフト、野外炊事等）
経 費: 食事代（弁当持参も可）、施設使用料、活動材料費が必要です。
 ※詳しくは、兵庫県立南但馬自然学校までお問い合わせください。

親子で自然学校

～親子で南但馬自然学校を楽しもう～

第 1 回 平成 23 年 12 月 17 日 (土)～18 日 (日)
 第 2 回 平成 24 年 1 月 21 日 (土)～22 日 (日)
 第 3 回 平成 24 年 2 月 18 日 (土)～19 日 (日)

場 所: 兵庫県立南但馬自然学校
参加費: 食事・宿泊・リネン代、活動材料費、保険料が必要です。
対象者: 県内在住の小学生とその保護者
募集定員: 10 組 (40 名程度)
内 容: 朝来山登山、自然物クラフト、星空観察、キャンドルサービス、クッキング 等
申込み: 事前に参加申込が必要です。

遊友体験活動

(里山^{ゆうゆう}遊友体験)

第 1 回 平成 23 年 7 月 9 日 (土)
 第 2 回 平成 23 年 10 月 15 日 (土)
場 所: 兵庫県立南但馬自然学校
参加費: 無料
対象者: 一般県民 (子どもだけの参加はご遠慮ください)
内 容: 第 1 回「初夏の自然を楽しもう」
 ～水辺の生き物を見つけよう～
 第 2 回「秋の森を楽しもう」
 ～発見!未知との遭遇きのこさがし～
申込み: 事前に参加申込が必要です。